
男にしてと願い忘れたorz

秋月 実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男にしてと願い忘れたorz

【Nコード】

N5023U

【作者名】

秋月 実

【あらすじ】

彼女は腐女子だった。転生の機会が現れた時、バリバリの攻め様になるべく、チートな能力とダンディーな外見を願う。しかし、神に男にしてと願い忘れてしまった為に、貴族の令嬢として生まれ変わってしまう。戦闘？ 貴族の令嬢にそんな事が許されるとしても？ そんな主人公が、精一杯男らしく生きる為に頑張ります。

プロローグ

私は土下座したまま、懇願する。

並はずれた力を。ダンディーな外見を。魔力を。

神を前にして恐れ多く思いながらも、私は得られたチャンスを逃がさなかった。

……ダンディーな美形に転生して、若い騎士達を片っ端から食いまくる。それが私の夢。

神様は、惚れられたいのなら、そうしようかと聞いたけど、私は首を振った。

人の心を操るのは好ましくない。自分の体や心をチートに作り替える事だけでも普通に努力している人達に申し訳ないのに、人様の人生までめちやくちやにしたくはない。

こんなチート能力を貰ったのだから、好みの人間は自分で引っ掛ける。それが出来ないなら、自分がチートを貰ってもなおゴミのような存在で、そもそも恋人を持つのにふさわしくないという事。

神様が領いた気配がして、私は転生した。

今も、神様には感謝している。

けどね。けどね。

あれだけダンディーって言ったんだから、男にしてよおおおおおとおおお！！！！

私は腐女子なの！ 心のチンコだけじゃなくて、リアルチンコが欲しかったの！

ダンディーな外見でチート能力持っていたって、貴族のご令嬢じゃ意味がないのよおおお！

せっかく転生したのに、受けなんていやーよ私！

いやでも私は、確かに男にしろとは言わなかった。私が悪いのだ。

神様ごめんなさい。チートスペックをありがとう。でも……orz
それに、誤算はもう一つあった。ファンタジー世界でも三次元は

三次元。

そう。騎士つつつても私にはコスプレした男にしか見えず、やっぱり私が一番萌え萌えするのは、騎士の漫画絵以外の何物でもなかったのだ……。

あー。やる気が失せるー。

でも、神様に精一杯頑張って生きてますって約束したしなー。勇者にもなりたいたなんて語ったしなー。

頑張りますか……。

1話　そして物語は始まる

まず、私のスペックを確認しよう。

私は何でも出来るわけではない。神様は、私が他者を尊重した事を重視して下さったのだろう。私とて、努力をしなければ、何も得られない。

自己流で剣術なり魔術なりを編みだすならば、それなりに勉強と実戦を繰り返さなければならぬ。

魔術や剣術を使いたいなら、見たり勉強したりと言うのが必要だ。しかし、ここでチートが生きてくる。

剣術を使っている所を繰り返し見るだけで、その流派の取得のフラグが経ち、後は一定以上剣を振っていれば自然に学習できるのだ。自己流にしても、しばらく適当に魔物を狩っていれば、自然と取得フラグが現れる。

つまり、努力とは、既成事実程度の物しか必要が無いのだ。

これをチートと言わず何と言う。

しかし、普通に剣を振るおうとしても止められてしまうだろう。

だから私は、段階を追う事とした。

そう、まず剣を、魔術を褒め称え、無邪気に見せて見せてと強請って、ひたすら勉強した。

徹底的に理解出来ない振りをして、見当違いで微笑ましい事を言っ
て見せた。

お抱え魔術師に懐いて見せ、読めない振りをしつつ「絵本を読む
ごっこ」に勤しんだ。

そして、7歳。ついに、私はお抱え魔術師の師匠が移動呪文を使
うのを見た。

習得フラグがたった！　これでいつでも逃げられる。

それに、傭兵が武器を振るう姿、騎士が武器を振るう姿、魔術を
使う姿の注視。そして勉強……それらの努力により、習得フラグは

乱立していた。後は実戦のみ！

そして、私は猛然と行動を開始した……。

とりあえず、同じ年頃の騎士の子と弟に棒で殴りかかった。無邪気さがポイントである。

「アルバートー。グスタフー。騎士ごっこしよ！」

そう言って、私は領に伝わるオルブライト流剣術を猛然と試し始めた……。

結論から言って、私はアルバートと弟をぼこった。

女の子に木刀は当てられないし、手加減が叶うほど力量差が無いから当然である。

弟に至っては、純粹に私より弱かった。

当然怒られたが、お父様みたいな素敵な騎士になりたかったの……。男の子として生まれていれば……。子供の間だけだから……。などと言って誤魔化した。

それに並行して、簡単な呪文の勉強も試しだした。

なんとしても私がやってみたいのが、忍法の習得である。私は思いつきで忍者の特訓や、忍法っぽい事をやる為に魔術の勉強もした。

ふふふ、時間がどうあっても足りないわ。

魔道具作成も始めた事だし……。

一応、女の子らしい事もするって約束で、礼儀作法にも時間とられるしね。

どう見ても男の外見、どんどんと強くなっていく剣や魔術の腕前。私は、自然と隠されていくようになった。僅かにあった縁談もシヤットアウト。

もちろん、私の思うつぼである。私は攻め様である。完全無欠の攻め様である。

十歳。勉強の甲斐あり、私は習得フラグを回収しつつあった。

そんな時に、父上が弟を魔物退治に連れて行くといいだした。

「私も連れて行って下さい、父上！」

「お父様と呼びなさい。全く、お前は……」

やれやれと首を振る父上。

「大丈夫です、頼もしいアルバートとグスタフ、お父様と騎士様、傭兵と、これだけいれば安全に決まっておりますわ」

私はどうしても行きたい、連れて行ってくれないならば金輪際礼儀作法など習わないと駄々をこね、傭兵の子に身をやつして連れて行ってもらった。

大活躍できた。

吐く弟を尻目に、魔物の首を掲げて誇らしげに父上に報告する私。これで外、しかも魔物がいる場所の座標を得たので、一人でレベル上げに来る事も可能である。ちなみに転移呪文は国を探しても数人しかないほど凄い力である。さすがチート。

かくして父上は二度と私を外に出さない事に決めた。

私はショックを受けた振りをして部屋に鍵を掛けて閉じこもり、意気揚々と転移の術を使って魔物退治に精を出した。

夜には心配したアルバートとグスタフが窓の外に来てくれたので、剣術の練習をした。

道端で犠牲になっていた旅人の服を剥いで、魔物の素材を売って冒険者ギルドで稼ぎ、特注で刀を作らせ、エンチャントし、一五歳になるまでせつせとレベルをあげた。

結構有名な冒険者になれた。覆面をしていたので、顔無しのアーロンと呼ばれた。

領主である父上に謁見する事になり、声色を使ったがお抱え魔術

師が気付きやがった。

怒られた。かなり驚かれた。物凄く怒られた。そして呆れられた。最後に、好きにしろと言われた。私はもう大喜びである。

アルバートとグスタフは許してくれた。二人とも度量の深い、良い男である。

私が男として生まれていたら食べてあげたのに、もったいない……。

とにかく、そんなこんなで、私は一五歳の誕生日、考えた。

そろそろ、私も一五歳である。腕も上げた。ダンディズムを発揮しても良い年頃なのではないか？

そこで私は、仮面を用意し、忍者服を初めとする各種衣装を縫う事とした。裁縫は礼儀作法の一環で勉強済みである。さらに魔道具作成スキルを使い、各種指輪を用意する。

最後に、遠見の水晶を用意。

これで準備は完了である。

さて、アリスにも出来るナンパの時間のお時間です。

その一。まずは服を着替えましょう。布を巻いて胸を硬く固め、コスプレをして顔を隠します。さて、鏡を見ましょう。ダンディですか？ まだ年若さは滲みでてしまいますが、謎の美少年臭がしますね。グッドです。顔を隠す際には、声を変える魔術を込めた仮面をしましょう。念の為、あそこには一物もどきの詰め物をしておくにとさらに良し。

その二。水晶を使い、好みの男が苦戦している場面を探しましょう。高い魔力が激突している場所が戦いの目印です。あそこの金髪の少年、明らかに貴族ですね。お忍びでしょうか？ 魔物相手に苦戦しているようです。

その三。転移呪文を使い、移動しましょう。

その四。颯爽と敵を倒しましょう。炎で派手に？ いいですねー。と言う事で丸焼きです。

その五。ナンパしましょう。

と言う事で、目を丸くしている金髪の少年に近付いて行く。

「獲物の横取りをしてすまなかったね、狼君」

その手を取って手の甲にキスをする真似をする。

「お前は誰だ！」

「私は君の強き瞳の輝きに見せられた哀れな旅人さ」

訝しげに私を見つめる少年。

「それよりも、どうしてこんな場所に？ 狼君が独り立ちするには、早いようだが」

その言葉に、少年は焦った声を挙げた。

「そうだ、弟だ。母上が、弟を始末すると。浚われた弟を取り戻さなくては」

「取り戻してどうするつもりだね？ 今なら、弟君を失うだけで済む。連れ戻せば、何が起こるか。聡明な君ならわかるはずだ。あの魔物との戦いなど、比較にならない戦いが君を待たろう」

「そんな事は承知の上だ！ 説教など沢山だ、助けてくれた事は礼を言う。だが、邪魔をするならそこをどけ！」

金髪の少年は叫ぶ。

「手伝おう」

「え？」

「手伝おうと言っている。相応の代償が貰えるならば」

少年は、間髪いれずに答えた。

「弟を守る為なら、何でも払ってやる！」

私は風の呪文を使い、金髪の少年を抱いて飛んだ。

子供を抱え、馬を走らせる騎士。

私はその眼前に降り立った。

「……その子供は返してもらおう。私の愛する狼君がそれを強請っている」

「王子！？ お前、何者だ！」

騎士が叫ぶ。金髪の少年……王子が辛そうな顔をした。

私は前へ出る。騎士が剣を振りかざした時、私は飛んだ。そして騎士を柔らかく抱きしめるようにして、転移させる。

そして、王都まで送ってあげた。町についた私は言う。

「では、代償を貰うでしょうか」

そして、王子の唇を奪う。王子は驚いた顔をした。

私は自分に浸りながら、口を離す。ああ、私にとってでも攻め様。そうよ、要は最後までしなければ、私は私の望むダンディで男を食いまくる最強の攻め様に君臨出来るのよ！ 女とばれなければ男同士も同じ……。

行ける、行けるわ！

そしてハーレムを作ったり魔王退治したりするのよ！

その六。連絡手段は必須です。私は最後に王子に指輪を渡した。

「困った時は、この指輪にアーロンと呼びかけるがいい。狼君がその美しさを保つ限り、私は常に傍にいる。ただし、次に指輪を使った時は、君の可愛い声を聞かせてもらうよ」

ふっ決まった。

「それでは、さらばだ」

その七。颯爽と帰りましょう。私は転移した。

その八。以上を繰り返しましょう。

私は、頑張った。それはもう頑張った。五年の努力で、変態紳士のアーロンと言う名前を頂いた。

あ、こっちは一切脱がないだけでエッチい事もしました。

ふふふ、美形と言う美形をホモにしてやったわ！

私が食った王子が陛下になってホモになってアルバートが食われてついでにグスタフも食われかけるといふ悲しい食物連鎖が起きたがな！

そして、食われかけたグスタフは必死で自分そっくりで女である私を推した。

完全な自業自得である。

そして私は、嫌々と後宮に入ったのだった。

2話 後宮でも攻め様は健在

後宮に入れる女を選ぶ折。陛下はふと、思い出したように言った。

「そういえば、お前には娘がいるのだったな」

陛下の言葉に、私は物凄い勢いで首を振った。

「醜く、粗暴な女です。後宮に入れるなど、ありえません」

「まさか、侯爵の娘がそんなはずはなからう。謙遜など珍しいな」

即位したばかりのまだ年若い陛下は、笑われた。しかし、こちらとしては死活問題だ。

「我が娘、アリスはともではありませんが陛下に相応しくありません。どうかお許しを」

「しかし、卿の娘も後宮に迎え入れねば、バランスがとれん。……それに、グスタフが自慢していたしな。グスタフにそっくりらしいではないか。……グスタフは嫌いではない」

「いえそんな!」

必死に固辞するが、押し切られる形で後宮へ娘を差し出す事が決まった。

それをアリスに伝えると、アリスは顔を顰めた。

「……断る。私は抱かれる側に回るのはごめんだね」

「もはや決まった事だ。ああ、何と言う事だ……。いいか、決して無礼は働くなよ」

アリスはやれやれとため息をついて、後宮へ行く準備を始めた。侍女たちと、嫌われる為の打ち合わせまでしている。

十歳で剣士としての頭角を現し、一五歳で優秀な冒険者として名を上げ、二十歳で国にまで名前をとどろかす。魔術師としての腕にばかり注目が行くが、私は剣の腕も並はずれている事を知っていた。その上、男を男として誘惑するのが大好きだ。

男の性格で、男を抱きたがるという難儀すぎる性格。

私は痛む胃を抑えながら、何事も無く後宮から出される事を願った。

陛下はホモである。私がそう誘導したから間違いない。

その上、私は女としては終わっている。よし、特に問題はないな。後は人前でだけ女装をすればいいだろう。

私が後宮へと入ると、大騒ぎになった。

「貴様、明らかに男だろう！」

「グスタフ様、いかに姉上が心配とは言え、御自分が後宮に入られるのは無理があります！」

……やれやれ。

「悪いが、私は女性でね。正式に陛下から招かれている」

「明らかに男の声じゃないか！」

……やれやれ。これはあれか。侍女に身体チェックをさせねばならんのか。

チェックさせられた。念入りに。

どうにか部屋につく。驚いた事に六部屋もあって、入口と奥の部屋は悪趣味で少女趣味な部屋にする事に決める。陛下を通す為の部屋だ。

左の部屋とその奥には落ちつける部屋を。右の部屋は作業用の部屋とした。

さて、その後は挨拶に赴かねばならない。

ただ、私は序列とかが良くわからないのだ……。

お茶会をした記憶など、一度たりともない。

正妃がいればいいのだが、その正妃がいないのだ。

まあいいや。

素直に礼儀知らずを詫びて、アルファベット順に挨拶しよう。

私は侍女に後宮の名簿を調べさせ、先触れを出して順番に巡った。

「きゃー！ 男が！ 男が！ 衛兵は何をしていますの！？」

「お、男……！？ 無礼者！ 無礼者！」

「……はうっ」

……私は姫君達の所に行くたびに、あそこのチェックを受けないといかんのか？

腹が立ったので、その後姫君達をナンパした。王子がトチ狂った

らレズだと名乗るつもりなので、アリバイ工作でもある。

三分の一程の興味を引く事に成功したが、その後更にボディチェックをされた。

その後、驚かせたお詫びとして全員に花を贈って置いた。

まあでも、偉そうなのとそうでないのとは区別がついた。

まあ、これでやるべき事は済んだはずだ。

やれやれとお茶を飲んでいると、今度は令嬢方の先触れが来た。

慌ただしい事だ。数人一緒に来た令嬢方は、不安そうに扉の前で囁き合う。

「そんな所にいないで、入りたまえ」

その言葉に令嬢方は部屋に入り、目を丸くした。

「まあ、素敵な部屋！」

頬を上気させて言うご令嬢。なんですと？　ピンクで覆ったこの

部屋が？

ぬいぐるみいっぱいのお趣味なこの部屋が？

「参考にするのはやめたまえ。これは男避けだから。まあでも、気に入ったならここでお茶をしよう」

可愛らしいキャラクターのポットやティーカップ。令嬢の目はもう釘づけだった。

「男避けって、正妃の座に興味はありませんの？」

「私は抱かれるより抱く側でいたい方でね。ご令嬢方にはぜひ頑張ってもらわなくては」

そっけなく言った言葉に、令嬢は頬を赤くした。

「それより、麗しいご令嬢とお近付きになれて良かったよ。ご令嬢を着せかえする事ほど楽しいものはない。……君、あれを」

侍女が心得た風に服を持ってくる。事実、私はコスプレは好きであるが、着せる人がいなかった。これぐらいの楽しみがなくては生きてはいけなからう。

本当は王子達に贈りたかったのだが、あまり服を詳しく調べられると、産地がわかってしまうのだ。正体を隠す上で、それは避けなくてはならなかった。女装プレイは好きなのに、残念な事この上ない。まあいい。それで今、気兼ねなくご令嬢を着せかえ出来るのだから。

並べられた服のエロさに、ご令嬢は顔を赤らめる。

「ぜひ着て見てくれないかね。気にいれば進呈しよう」

「あの、もしかして、口説いてます?」

私は、ふっとご令嬢方に笑いかける。

「美しいご令嬢を前に口説くのは、義務だ」

「あの、着て見てもいいですが……。エッチなのは駄目ですよ?」

「あら、着るの? なら、私も着ようかしら」

そういつて、ご令嬢方は恥じらいながら着る。
メイド。チャイナ。着物。(すべてエロ仕様。含む下着)

良い眼福になった。

その後、お礼として令嬢方が気にittaいたティーセットの予備やぬいぐるみをあげた。

とても喜んでいたようだ。

その後、話が広まり、私は男装、令嬢方はエロ服で茶会を開いた。題して陛下ごっこである。

令嬢は笑いさざめきながら、大胆に私を誘惑してくる。

私も笑ってそれを迎え入れ、押し倒す真似をしたり胸を揉んだりした。

私には女の子とどうこうする趣味はないが、そんな私でも断言できる。

これはこの世の天国だと。

その後、男役はローテーションする事になり、週に一度、この乱交まがいの茶会が行われる事となった。

私が下手な化粧とオカマっぽい動きで、笑わせると、令嬢方が笑いさざめく。

ここの後宮の雰囲気はかなりいい。私は胸をなでおろした。

しかし、陛下をホモに、正妃候補をレズへと突き落とす私は悪い攻め様である

王族の前途は暗いかもしれない。

そして、陛下主催の小宴が行われる事となった。

後宮の全員が出席する事となる、大事な会である。

令嬢方は私の部屋で、頑張りましょうね、と声を掛けあって出陣した。

今回、ホモの陛下をまずは女好きにするのが肝要なのは、と私は言い、意図的に令嬢の行動と服装をばらせ、フォーメーションを組むようにして見た。

正妃候補と陛下の仲を根本的な意味で邪魔している私だが、彼女らが陛下とラブラブでいてくれればそれに越した事はないのである。まず、私がくねくねとしながら、下手な化粧で真っ先に陛下の所

へと向かった。

「陛下、お招きありがとうございます。嬉しいですわあん。グスタフちゃんに感謝しなきゃあん。あら、アビゲイルちゃん達がいらっしゃるわあん」

無論、私は引き立て役である。

ドン引きする男共。ここで真打登場！

例えるならまさに花。

令嬢達が、あるいは艶やかに、あるいは可愛らしく、あるいは颯爽と出てくる。

話しかける順番から何から何まで決まっている。

華やかな激しさを演出する為、堂々たる対立の演技も入れてある。壁の花役も配置。もちろん、切なげなため息と憂い顔がオプシオンとしてついてくる。

圧倒される男共。

私がホモへと塗り替えてやった男たちですら、見惚れている。

更に、一番身分の高い令嬢のアビゲイルが一番手を出しやすく、華やかになるように配置してある。

陛下とて、家臣への配慮は必要だ。身分が高く、華やかであれば、手を出す確率は上がる。

その代り、今後の小宴の主役も、私以外でローテーションを組む予定である。

最も、協定はローテーションが終わるまでだ。

その後は、可憐な花たちの激しくも美しい戦いが始まる予定だ。

「いやいや、素晴らしい姫君方ですな。陛下は幸せ者です」

「ああ……」

陛下は頷き、アビゲイルに視線を寄こす。良い傾向だ。アビゲイルが艶やかに微笑み返し、そしてアビゲイルのお召しがあった。

私達が翌日、宴を開いたのは言うまでも無い。

その後、ちよくちよく小宴が催されるようになり、さすがに主役の存在に気付いたようだ。陛下も、主役として選ばれた娘を手折っている。さすがに空気は読めるのだ。

「……いやはや、本当に陛下の姫君方は素晴らしい。普通、後宮の姫君達は足を引っ張るもの。それを、姫君方は協力してそれぞれを順に引き立てていらっしゃる」

「ああ、少し驚いた。主役を読み違えないよう見極めるのが難しいがな」

「……少し、妬けます。最近の変態紳士も来て下さらない」

「明日はお前を可愛がってやろう」

臣下と陛下が和やかに話すのが聞こえる。

よしよし、上手い事言っているな。やっぱりホモだけど。

しかし、寂しがっているのか。可愛い事である。そういえば、ここ半年は忙しくて変態紳士出勤してなかったな。

明日からは暇を見つけて順に花を観賞して回る事にしよう。

3話 愛人達と攻め様

「子猫ちゃん、寂しかったかい？」

ついつと顎に手をやって、上向かせる。

武官は頬を染めて、されるがままに口づけを受けた。

「最近ご無沙汰でしたので、魔王領にでも男漁りに行ったかと思いました」

そう恨み事を言う。そう、この武官に助けを求められて駆けつけたところ、相手が美形のダークエルフだったのだ。

もちろん倒した後、口説いて逃がしました。

怒る武官に、私は正義の味方ではない。咲き誇る薔薇の味方なのだと演説して武官にセクハラしてごまかしました。

「まあ花は手折っていたね」

武官は唇を噛みしめ、私を部屋へと誘い込む。

「今度こそ、貴方をその気にして見せますよ……」

武官の痴態美味しいです。でもね、私女だから、君には襲いかかれないのだよ。

心のチンコはビンビンなのだが……。

私は至って冷静な振りをして、着衣のままにゃんにゃんし、悔しげにする武官にキスを落として次の花を手折りに行った。

「来たか……。俺の事など忘れたかと思ったぞ」

「咲き誇る薔薇を私が忘れるわけがない。……寂しかったか？　ア
ーチボルド」

私は陛下を抱き寄せる。

陛下は自らキスをしてきた。

「思ったのだ。お前がその気にならずとも、俺がその気になれば何も問題はないのだと」

そうしてにやりと笑ってきつく抱きしめてくる。
しかし、私も負けてはいられない。

「あいにく、私は抱かれるのは大嫌いでね」

私はずるりと陛下の手から抜け出し、陛下の手を逆に拘束して唇を奪い、にやんにやんした。ふはは、陛下と同じ事を考えた者がいなかったと思うか！

その場合のテクも学んでいるのである。

そうして私はあらかたの男を食って、後宮へと戻った。

後宮では、変態紳士がまた出没したらしいとの噂でもちきりだった。

「くっ変態紳士、なんて羨ましいんですの！」

「変態紳士様、私もぜひお会いしたい……」

「きーっ、私の陛下によくも！」

「かくなる上は、更に誘惑の技を磨きますわよ！ 先日一周して、休戦協定が終わったばかりですが、一丸となって陛下の目を覚まさせましょう」

と言う事で、陛下ごっこである。

今回の陛下役はアビゲイルだ。

「ふふふ、さあ、可愛い声でおなじになって」

正しく百花繚乱のエロ服で誘惑する皆さん。一人浮く私。

今日のメインターゲットはメアリーらしい。

チャイナ服をめぐりあげられる。その中はノーパンである。

私を除く全員が目出度く処女を捨て、もはや大人の玩具を使うのを躊躇する理由も無い。

「あら、もうここをこんなに……」

「あら陛下、メアリーばかりずるいわ。私も可愛がって」

「次は私よ」

「あら、私よ」

やんわりと争う姫君達。ここでポイントなのは、醜い争いに見えないようにする事である。

ヒートアップして姫君達が大変な事になった所で、イライラした様子の陛下が制止する侍女を尻目に現れた。

そして、目を点にする。姫君達や私の目も点である。

考えても見てほしい。浮気の真っ最中に旦那が来たら誰だってそうなるだろう。

あ。立った。

姫君達が顔を赤らめてスカートを整えたりしていると、陛下は艶やかに笑った。

「……続けてくれ」

「あ、あの、陛下……」

「いいから、続ける。こちらはあれに寸止めされて、溜まっているんだ」

アビゲイルが、真っ先に立ち直ってメアリーを苛め始めた。

姫君達も動きだす。

陛下がそれに混ざって片っ端から姫君を食うのに、時間は掛からなかった。

ちなみに私は速やかに撤退した。

その後、陛下は私の所に一度も来てなかった事に気付いたらしい。今夜は私の部屋に来ると仰った。

余計な事を……。

まあいい。対策はしてある。

私の部屋に行くと、まず陛下は引いた。

ピンクのパンチである。フリルのキックである。ぬいぐるみの頭突きである。

とにかく、ファンシーな部屋と言うのは、男の滞在を拒否する物だ。

そして、私は下手糞な化粧でくねくねとする。

「さあ、陛下。ベッドにお休みになって」

「あ、ああ」

陛下が物凄く嫌そうにベッドに横になる。

「じゃ、おやすみなさい」

パタンと私は本来の居心地が良い寝室に引籠り、眠る。ふふふ、あの陛下の目が点になった顔。

陛下が居心地の悪いファンシーな部屋で寝る間、私は居心地の良い普通の部屋で寝るのだ。

残念だったねえ！

そして朝。陛下は、何とも言い難い顔で、私を見た。

「お前は、俺の寵愛を得ようとは思わないのか」

「陛下は私を好きなのですか？ 違うでしょう？ ならば、互に都合がいいではありませんか」

陛下は目を点にする。

「お前は変わっているな。……化粧はするな。その顔なら、いつそ素顔の方がマシかも知れん」

やばいっこれはフラグが立つ気配！

「あら。まさか、私が陛下になびかない一点で私を好きになるとか？ まさか。それほど他の姫君達がつついていていと思われているなら、きつと姫君達はがつかりしますわ。まさか王妃をそんな基準で選びはしないでしょうね？ やる気のない王妃は、国を傾けますわ」

「いや。そうだな……。お前は王妃になる気が無いか？」

「レズですから」

「……俺もホモだ」

二人、乾いた笑い声をあげる。そうして、私は陛下をぐいぐいと外へ押し出し、扉を閉めた。

おのれ、これでフラグが立つとは何と言う変態。

さすが私の愛人なだけあり、教育が行きとどいている。

しかし、それでは駄目なのだ。陛下はアリスの存在は忘れなければならぬのだから。

……その後、陛下は陛下ごっこをする時に顔を出されるようになり、アビゲイルが目出度く妊娠した。

計画通りと私が悪人顔をしていると、陛下からの呼び出しがあったので、変態紳士の服装で行く。

寝室で陛下がアビゲイルから借りたらしいエロ服で恥ずかしがりながら尻を向けていた。

理性が吹っ飛びそうになったが、ギリギリの所で踏みとどまる。

「薔薇の君よ、今この瞬間、君が世界で一番美しい」

にゃんにゃん。

「くう、ここまでしても入れてくれないどころか、立ちもしないのか。お前、不能なのではないか!？」

「ふふ、どうだろうね」

「……お前、俺の物になれ」

「アーチボルド……私は誰の物にもならないよ。風は留まった瞬間、死んでしまうのさ」

「アーロン……」

陛下がキスを強請って来たので応える。

「アーロン、俺は怖い。お前は、美しい間だけ俺と共にあるといった。俺はどんどん年老いて行く……。信じられるか？　俺はもうすぐ、父となる」

「花は散るから美しいのだよ、アーチボルド」

そして私は体を離れた。

その日、アビゲイルが、正妃となるという発表がされた。

よしよし、そのままアビゲイルとラブラブでいて、アリスとしての私の事は忘れ去ってくれ。

もちろんアーロンとしての私は忘れさせないがな！

4話 傷跡、本当は消せるのに誰も言いださない不思議！

対立する武官と文官、そのど真ん中に私は降り立つ。
一ミクロンであろうとも、片方に偏る事は許されない。

「アーロン！ 来てくれたか！」

「アーロン！ 信じていました」

そう二人は口々に言う。そして、互いに睨みあった。

「アーロン、お前は俺の為に来てくれたんだよね？」

「アーロン、貴方は私の為に来てくれたんですよね？」

うん、私の愛人が大☆激☆突中なんだ。それこそ秘密兵器として私を呼ぶほどの。

「もちろん、私は咲き誇る花々の味方だとも」

私が二人に平等に愛の眼差しを送れば、二人は詰め寄って来る。

「ならば、どっちをより愛しているのだ」

「私を花だというのなら、どちらがより美しいのですか。貴方は、どちらを味方しに来たのですか」

誰の味方だ、と詰め寄る二人。状況は予測できている。問題ない。

「私は花を散らせに来たのではない。より美しく咲かせる為に来たのだよ」

そして呪文を唱える。二人とも拘束。喧嘩の原因？ 聞きません。ええ、聞きませんとも。そう大した事ではないのは確認済みである。この二人、元からライバルのような関係なのだ。

二人を魔法の縄で拘束した後、ぱちっと指を鳴らすと、二人とも拘束された状態で魔法の縄が取り寄せられる。

「何をする！」

「アーロン！」

私は、全く同時に拘束された二人の尻に触った。

「争いは何も生まない。花々が競い合う姿も美しいが、互いを引き立て合う姿が見たい」

そんな感じの事を囁き、にやんにやん開始。

ライバルの前で乱されていく姿、可愛いです。

二人の制止の言葉は聞きません。

夜はまだ始まったばかりである。

というわけで、一時間ぐらいにやんにやんしていると、私を呼ぶ声が聞こえた。

この声はこの前ナンパした兵士！

どうやら、私が出した事に嫉妬した城仕えの魔術師に苛められているようである。主に性的に。

これはぜひ特等席で見なくては！

私はひくひくしている武官と文官に甘い言葉を囁き、解放してから現場へと急行した。

もちろん魔術師を煽って兵士をにやんにやんさせた後に魔術師をにやんにやんする為である。

華麗なる変態紳士アーロンは忙しいのだ。

魔物退治している花々の手伝いもしないといけないし、断じて後宮にいる暇はないのである。

なのに、後宮ではアビゲイルの為に祝いのイベントが発生した。王都の外の神殿に祈りに行くという物である。

側室達が挙って同行を望む。それも当然だ。貴族の令嬢が出かける機会はめったにない。それも、後宮に入ってしまったえばますます出かける事は出来なくなる。

アビゲイルも同行を快諾し、まかり間違って誰もいないからと私の所に来られても困るので、私も同行する事にした。

もちろん、外は魔物が出るので護衛は必須である。

跡継ぎを宿した正妃アビゲイル、そして側室の皆様。

これらを護衛するため、護衛もまた精鋭が選りすぐられた。

まあ……それを蹴散らせるほど強い魔物が現れたんですけどね。

しかも群れだったんですけどね。

「あ、アビ、アビゲイル様を逃がさないと……」

姫君の一人が健気に言う。アビゲイルを中心に、まるで守るかのように姫君達は身を寄せ合っていた。

「正妃たるもの、側室を、守ってくれる騎士を置いて行けませんわ！」

震えながらも、堂々と言い放つアビゲイル。

「大丈夫、落ち着くがいい」

私は侍女が差し出した大剣を肩に担ぎ、魔物へと駆けだした。

「アリス様！」

心配する姫君達の声。

「オルブライト流剣術、竜・斬・剣」

神様にねだった渋い声（無論男の声にしか聞こえない）で囁き、
魔物の内一匹をぶった切る私。

姫君達と騎士が絶句する中、私はきりっとした渋い顔（無論男にしか見えない。化粧してなかったので尚更だ）で、騎士達に命じた。

「掃討する……。お前達は姫君達を守れ」

シニールである。物凄くシニールである。だって歴戦の戦士にしか見えない人がさ、ドレス着てたらどうよ？

あ、変態紳士とばれないように、剣も魔術も癖変えてます。無論装備も。この日の為に、「アリス」が使う要のオルブライト流剣術とアリス流鉄扇術、変態紳士が使う用のオリジナル剣術を用意していたもの。

でもまあ、あれだね。剣は肌身離さずだったけど、防具は正直意識の外だったね。

次から気をつけよう。

魔物が吐く炎を、結界呪文で真正面から受けとめる。

避けた方が楽だけど、背後に令嬢達がいるからね。

基本大物ばっかだけど、大猿みたいな魔物がひときわでかくて強い。こいつが指揮官か。ただ単に群れに遭遇したというわけではなさそうだ。

私が苦戦しそうだと判断するのだから、相当だ。

防具については問題外だが、剣も拙い。あくまでも「令嬢」が手に入る範囲の物にした為、変態紳士の使う物ほどこいいものではないのだ。具体的に言うと、いいエンチャントついてないです。武器強化の呪文もあるけどさ、この剣ぐらいでかいと、硬化した魔力で覆うのも大変なんです。

さすがに私も正体がばれないようにする為に命を捨てる気はない。もう駄目だと思ったら、いかになく変態紳士の時に使っていた技を使うつもりではある。

ま、上手く手加減して、顔に傷作って後宮から下がるのもいいかもしれないね。

そう考えながら、大猿と対峙する。

大猿と私の力が激突する。やはりというべきか、酷使されていた剣がへし折れた。

更に大猿の追撃。私は剣を捨て、鉄扇で大猿の爪を受ける。

鉄扇はリーチが短い、魔力による強化が非常にやりやすいというメリットがある。

大剣だとちょっと無理だが、鉄扇ならば受け流しが使える。

ただし、やはりリーチが短すぎるため、余波を食らった。傷を負ったし、ドレスは肩のあたりが消滅して大胆なデザインとなった。

ぎいんという音を聞きつつ、大猿の爪を真正面から受けて立ち、受け流し、懐に入った状態で鉄扇で首を掻き切った。飛ぶ大猿の首。

「替えの剣を」

侍女が替え剣を抱いて騎士の壁に阻まれ、または魔物の群れに躊躇する。けれど、騎士のひとりが剣を預かり、走って来てくれた。

「札を言う」

可愛い騎士だったので流し目。後でアーロンで食おう。

大物を全部倒した所で、私の指示通り防御一辺倒になっていた騎士達が掃討戦に入った。

私は退き、侍女から渡されたタオルで顔や肩から上を拭く。主に自分の血を拭う為だ。

侍女が泣きそうな顔だが、大丈夫だと伝え、お湯を沸かさせる。

……所でアビゲイル、君はなんで私の下着を脱がしてスカートをめくり、その下を凝視しているのかな？

残念ながら、そこを探してもあるのは心のチンコばかりで、実態はないのだよ。

掃討が終わった頃、侍女が布で壁をつくり、私はお湯で濡らした布で返り血や汗を丁寧に拭い、治療をして、服を着替えた。

令嬢達は私の周りに寄り集まって、大丈夫かとしきりに心配する。気のせいかな、顔を赤らめている令嬢も何人かいる。

ついた神殿では、男の服を贈られ、陛下ごっこで陛下役をするよう強請られた。

可愛く、かつ必死におねだりされては仕方ない。私は快諾した。

神殿のある町では私の武勇伝は速やかに広がり、野次馬が現れて大変だった。

それでも護衛を引き連れての町の散策はしたけどね。

どう見ても男だろお！

きつとあれは陛下の懐刀さ。

浮気相手を堂々と令嬢として引き入れたのか……？

渋すぎる……素敵……。

など、様々な噂が流れていた。

傷跡は残るようになったが、ダンディさが五割増しになったからいいや。

顔に傷が出来て美形度があがるって、本当にあるんだね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5023u/>

男にしてと願ひ忘れたorz

2011年7月11日13時51分発行